

提出日：令和 3 年 3 月 11 日

所 属： 生命・環境科学部 環境科学科

氏 名： 村山 史世 職位： 講師

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

環境科学科および全学部全学科の1・2年生向けの教養科目・導入科目を主に担当している。高校までの学修と専門科目の接続時期の学びを担当している。学生には広い視野と「学び方を学ぶ」ことを身につけてもらうのが、主たる役目となる。またSDGsなど、専門知識をつなげて総合化する手法を考えてもらうことも教育的な責任である。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
人権論	環境科学科	選択	1	72
法学入門	環境科学科	選択	1	67
地球環境科学	環境科学科	必修	1	83
地球共生論	全学部・全学科	必修	1	556
日本国憲法	全学部・全学科	選択	1・2	140
地域コミュニティ論	環境科学科	選択	2	45
環境フィールドスタディ	環境科学科	選択	2	28
科学技術英語	環境科学科	選択	3	3
リサーチレーション	環境科学科	選択	2	84
卒業論文	環境科学科	選択	3・4	4・5

2. 教育の理念（育てたい学生像、あり方、信念）

・学生を支援するが支配しないことを心がけている。私は大学院博士課程で指導教授からアカハラ・パワハラを受けた経験がある。指導教授は私を支配しようとした。その後アメリカに留学した時に指導教授は「君は何しにアメリカに来了？君に私は何を支援できるんだ？」と接してくれた。支援と支配に関して、私には恩師と反面教師がいる。

・学生の意欲を大切にす。意欲は学力の基盤、学ぶこと、生きることのエンジンであるから。

・学びは学生個人だけでも、教員だけでも成立しない。親密な関係者による相互作用によって成立する。良い相互作用が生じる学習環境に気を配りたい。

・学生が卒業後も自立して生きてゆくためには、学び方を学ばせ、学生の興味・関心を尊重してゆきたい。

・講義は、学生が世界で生きてゆくための準備であり、手段である。講義を自己目的化するべきではない。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

方針

- ・オンライン授業においても、「離れていても共に学んでいること」を体験させたい。
- ・相互評価や相互参照、対話を通じて、協同的な学びを実現したい。
- ・学生が自分で問いを立てて、自分で調べ、自分で考えて、自分で回答を見つけて、理由を自分の言葉で表現できるように教員として支援してゆきたい。
- ・15（14）回の講義が終わったのちに、学生に遺るものを考えて講義したい。
- ・大学で学んでいることと現実世界がつながっていることを学生に体感させたい。

方法

授業の動画について

- ・動画では顔を見せて、学生に呼びかけて授業を始めるようにした。
- ・おまけの動画をつけて、学生に息抜きもしてもらおうようにした。

授業の資料について

- ・スライドはPDFにして学生が見返せるようにした。
- ・毎回の出席課題において、発問によって授業内容を振り返り、期末レポート等への準備ができるようにする。
- ・出席課題は、学生による相互参照・相互評価が可能な設定にして、他の学生の達成度を意識してもらおうようにした。協同学習へはまだつなげられていないが、孤独な学びを多少とも緩和できた。
- ・出席課題で出された学生の疑問や質問、意見に応えるような授業構成にした。
- ・現実の事件や事例などを授業の教材にして、現実世界とのつながりを意識してもらおう。

授業の進め方について

- ・知識の一方的伝達だけを強調しないで学生が考えたり、調べたりするワークや時間を確保している。
- ・学生の発言や想いを拾い、学生と共に言語化をする。

アクティブラーニングについての取組

- ・対面方式では、ジグソー法を用いた。（人権論）
- ・調べもの学習や外部へのプレゼンテーションなどを行った。（環境フィールドステイ）
- ・オンライン方式では、反転学習も導入した。

ICT の教育への活用

- ・ 学理で課題を相互参照させている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ① 教育（授業、実習）の創意工夫（B）
- ② 学生の理解度の把握（B）
- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（B）
- ④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）
- ⑤ 双方向授業への工夫（B）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

取組の項目において、A が（十分実施している）、C が（うまく取り組めていない）ならば、いずれもあてはまらない。したがって、すべての項目で B（実施しているが十分でない）となる。オンラインに切り替わり、授業の目的を再考して、現時点での教育環境で考えつくことはすべて試してみた。それが学生にどのような効果をもたらしたかは、もう少し時間をかけて検証したい。現時点では「B」としか言いようがない。

担当している科目が主に 1・2 年生の教養科目であり、選択科目である。必修と異なり、学生自身が選択して履修している。最後まで履修する学生は、毎回の出席課題もよく調べ、よく考え、質的にも量的にもたくさん書いてくれている。学びは、対面方式の時よりも深まったと思われる。

他方、選択科目であるので、ドロップアウトする学生も増えた。家で一人きりで動画を観る学びにおいて、学生に十分学びのモチベーションを持たせられなかった責任を痛感している。オンラインで学生が置かれていた状況に配慮が足りなかったのかもしれない。

オンライン方式では、学生同士が授業内容を確認する、キャンパスで大学の雰囲気を楽しむ、学びやサークル活動で学生同士助け合う、先輩や後輩、教職員と交流する機会が失われている。特に 1 年生には全く欠落している。オンラインでも、このような経験をさせることはできないかを模索してゆきたい。

模索の糸口として、相互参照・相互評価を導入したが、まだまだ研究してゆきたい。

5. 学生授業評価

- ① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。
- ・課題の量や質や学生にとっては過重であることに気づいた。そこで、課題の質や量は調整した。
- ② ①の結果はどうでしたか。
- ・特に学生からの反応はないので、調整は良かったのではないかな。
- ③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。
- ・毎回の課題を成績評価の基本とし、期末はレポートだけにして、期末試験をやめる。オンラインが続くならば、暗記型の期末試験は意味がないし、暗記しただけの知識は定着しないだろう。このような考えを学生に伝えて、毎回の課題の意義を理解してもらい、単に感覚的に「過重」と感じてもらわないようにしたい。

6. 学生の学修成果

- ① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。
- ・期末試験をやめて、毎回の出席課題と期末レポートで、深く考え、論理的に記述してもらうことで、暗記型知識ではなく、体系的知識と、現実世界においても活用できる知識を身につけさせたい。
 - ・相互参照・相互評価だけでなく、学生の協同学習がオンラインでもできるような方策を考えたい。
 - ・学生が言葉にできなかつたり、しなかつたりする気持ちや価値観にも配慮するように努力したい。
- ② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価
- ・前期のFDで事例とした発表できたのは、学生が推薦してくれたからだと思う。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

- ・教務課主催のFDにはすべて参加した。
- ・国立情報学研究所主催「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」には、数回参加したり、アーカイブで視聴したりしている。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

- ・短期的には学生の満足度をあげたい。
- ・中期的には、協同学習につながるような、対話型授業、反転学習、相互評価の手法などを開発してゆきたい。
- ・また、知識の伝達だけでなく、学生が学びを楽しめるための手法の開発をしてゆきたい。
- ・自らは、ファシリテーターとしての技量をもっと豊かにしてゆきたい。
- ・長期的には、試験ではない知識の定着と評価方法を試みたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス。学理にアップした動画、教材、出席課題。学生のプレゼンテーション動画。